

The International Neuropsychological Society 41st Annual Meeting 参加報告

岡村 陽子

The International Neuropsychological Society は、2月は北米、7月は北米以外を開催地として年2回大会を開催しており、2013年2月の41st Annual Meetingはハワイ島にて開催された。今回筆者が参加した41st Annual Meetingのテーマは“Brain Health Through the Lifespan”であり、生涯を通じた脳の健康や効果的な脳へのアプローチといった視点で様々なシンポジウムやワークショップが構成されていた。ポスター発表のテーマを見ても、小児期の脳損傷や軽度発達障害に関する神経心理学的なアプローチや、認知症など高齢者を対象とした認知神経心理学的研究に関して数多く発表されていた。大会主催の講演では、90才を超えた超高齢者の病理学的研究も報告され、高齢者を対象とした神経心理

大会プログラム

学といっても、認知症や高次脳機能障害者のような障害のある人を対象とするだけでなく、ノーマルな老化についても最新の知見が紹介されていたことが大きな特徴であったように思われる。現在の筆者のテーマである高齢者への認知リハビリテーションを考えるうえで、様々な知見を得ることができ、非常に有意義な大会であった。また、前頭葉機能や遂行機能障害について数々の研究をなしているDonald Stuss博士が行った招待講演“Frontal Lobe Functioning in Daily Life”に参加し、これまで筆者が数多く引用させていただいたStuss博士本人の話を直接聞くことができたことは、筆者にとって貴重な経験であった。前頭葉が絡んだ遂行機能を日常生活の中でどう評価していくかを考えることが必要であることが痛感され、今後の研究の発展におおいに参考となる講演であった。

通常2月に開催されるThe International Neuropsychological Societyの北米大会は、夏季のヨーロッパ中心の大会に比べ固い雰囲気があると評されることも多いが、本大会は、ハワイ島で開催されたこともあり、非常に開放的でフレンドリーな雰囲気であった。そんなリゾート的な空気感の中でも、早朝から開始される教育的なワークショップや、ボードにはあってある数多くの求人票、空きスペースで行われている就職のための面接などから、この大会が求人や神経心理学を勉強している学生、これから職に就こうとしている初心者への教育や情報提供の場として機能している様子がうかがわれたことが、大変興味深く感じられた。日本にもこうした臨床神経心理学

を学ぼうとする学生や経験の浅い臨床家に対する教育・研修の場、あるいは交流の場が確立される必要があるように思われ、そうした意味でも意義深い経験であった。